

シリーズ第39話

下肢静脈瘤はありませんか

今回は「下肢動脈瘤」のお話です。ふくらはぎや太ももが何だかコブのように膨らんでいたり、青い筋が目立ったりしていませんか？これは皮膚のすぐ下の静脈が風船状に膨れた下肢動脈瘤という病気です。



静脈の役割の一つとして、血液が心臓に戻る経路としての機能があります。血液は心臓へ向かう一方通行ですから、手足の静脈には重力に逆らって血液を

戻すための仕組みがあります。

ひとつは手足の筋肉、特にふくらはぎの筋肉が足から血液を心臓へ汲み上げるポンプの働きをします。このため、ふくらはぎの筋肉は「第2の心臓」とも呼ばれています。もうひとつは静脈の中にある「逆流防止弁」の存在です。

この弁が壊れ、血液が逆流すると血液が静脈の中に溜まり、その結果、静脈に慢性的な圧がかかることでコブのようになってしまいます。この静脈瘤がある方は、足に余分な血液を抱え込んでいることになり、足がだるい、重い、痛い、かゆい、むくみ、こむら返り(足がつる)などの症状が出てきます。だるさやむくみは夕方になり強くなります。



市民病院 血管外科
院長 綿引洋一

また、瘤内(こぶ)に血栓ができると痛みや発赤を伴う「血栓性静脈炎」なども起こります。炎症を起こすと皮膚の変色や潰瘍になることがあります。

これらの症状は冬より夏に憎悪しやすくなります。また、性別では女性に、年齢では高齢者に多く見られますが、男性にも起こる病気です。遺伝的要素もあり、家族に静脈瘤のある方も起こりやすくなっています。妊娠や分娩をきっかけに静脈瘤が目立ってくるものが多く、特に2回目以降に悪くなる傾向があります。職業や生活のパターンでは、肥満の方、立ち仕事の方や運転手など、足を長時間下げる職業にも多く見られます。静脈瘤の検査には超音波検査

があり、原因が足の付け根からの静脈なのか、膝裏の静脈なのかを調べる必要があります。まれに手術をしてはいけない下肢静脈瘤があるので、超音波検査は大変重要です。治療法は3つあり、手術、硬化療法(薬でコブを固める方法)、弾性ストッキング着用が挙げられます。病気の程度に応じてこのいずれかを選択しますが、「」はだるさなどを軽く感じさせる程度の効果しか期待できません。しっかりと治したい方、皮膚の変色や潰瘍のある方には手術をお勧めします。

下肢静脈瘤は直接生命に危険を及ぼすことはありませんが、下肢静脈瘤のある方は、ない方に比べ深部静脈血栓症(エコノミークラス症候群、旅行者血栓症)を発症する確率が数倍高くなります。行楽シーズンを迎え、中・長距離移動するため交通機関を利用される場合は要注意です。お心当たりのある方、足の静脈の「浮き」や「むくみ」の気になる方は、血管外科にご相談ください。